

子どもと学校教育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/41396

9. 子どもと学校教育

嶋 津 奈 緒

1. はじめに
2. 宝立町の子ども
3. 宝立町の学校教育の変遷
4. 宝立小中学校
5. 「ふるさと珠洲科」
6. 考察
7. おわりに

1. はじめに

今回の調査で訪問した珠洲市宝立町は、海沿いの静かな集落である。現地調査の初日に公民館長さんから地区の概要をお聞きした際に、1学年10人前後という、子どもの数の少なさに衝撃を受けてしまった。私の出身小学校は1学年100人を超える、福井市内でも大きな小学校だからである。その衝撃から、宝立町の子どもに興味を持ち、現地調査中は、主に子どもの日常生活や学校生活についてお話をお聞きした。また、話を聞く中で、宝立小中学校は石川県唯一の小中一貫校であることが分かり、その独自のカリキュラムや取り組みにも関心を持った。

そこで本章では、学校教育をメインテーマに、まず、学校教育に関心を持ったきっかけであり学校教育の主体でもある、宝立町の子どもについて述べたあと、宝立町の教育の変遷を述べ、宝立小中学校の取り組みやカリキュラムについて、本調査と補充調査でお伺いしたことをもとにまとめていこうと思う。

2. 宝立町の子ども

この節では、私が宝立町の子どもに興味を持つきっかけとなった、宝立町の子どもについて、

まず、子どもの数の変遷についてまとめ、後述する学校教育に関連して、教育の場以外での子どもについて、子どもの遊びを中心にまとめる。

2.1 子どもの数の変遷

宝立町の子ども数はどのように変化しているのだろうか。以下の表とグラフは、宝立小中学校の校長先生に見せていただいた、各年の宝立小学校の卒業生数からまとめたものである。なお、後述するが、1961年4月に、鶴島小学校・鶴飼小学校・柏原小学校の3校が統合して宝立小学校が創立し、2012年4月から小中一貫校となっている。

表1 宝立小学校の卒業生数 (単位:人)

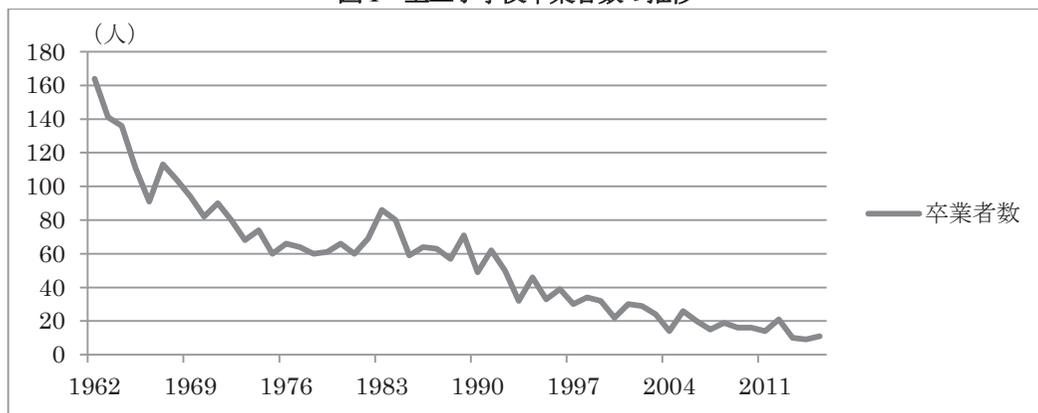
西暦	卒業生数	西暦	卒業生数	西暦	卒業生数
1962	164	1980	66	1998	34
1963	141	1981	60	1999	32
1964	136	1982	69	2000	22
1965	111	1983	86	2001	30
1966	91	1984	80	2002	29
1967	113	1985	59	2003	24
1968	104	1986	64	2004	14
1969	94	1987	63	2005	26
1970	82	1988	57	2006	20
1971	90	1989	71	2007	15
1972	80	1990	49	2008	19
1973	68	1991	62	2009	16
1974	74	1992	50	2010	16
1975	60	1993	32	2011	14
1976	66	1994	46	2012	21
1977	64	1995	33	2013	10
1978	60	1996	39	2014	9
1979	61	1997	30	2015	11

(出所 各年の宝立小学校卒業生名簿)

表やグラフからも分かるように、宝立小学校の卒業生数は、宝立小学校創立の1961年から右肩下がり減少しており、1969年には100人を切り、1992年度に50人を切っている。表やグラフで表されている卒業生数というのは、1学年での人数であるが、2014年度は、宝立小中学校の児童・生徒全員、小学校1年生から中学校3年生までで100人にまで減少しており、10人を切っている学年もある。宝立町鶴島地区の方々も、話をお聞きする中で、子どもの数が減っていること

を嘆いていた。宝立小中学校卒業後は、たいていの子どもが珠洲市内の飯田高校に行くが、大学進学とともに珠洲市を離れることが多く、珠洲市での通年の安定した仕事は、市役所職員や教員など限られているため、大学を卒業してから珠洲市や宝立町に戻ってくるのが少ないようだ。

図1 宝立小学校卒業生数の推移



(出所 各年の宝立小学校卒業生名簿)

2.2 教育の場以外での子ども

この項では、教育の場以外での子どもたちについて、宝立町の子ども遊びを中心に、現地調査でお話をお伺いしたことを、男の子の遊び、女の子の遊び、現代の子どもの遊び、の順にまとめる。なお、「現代の子どもの遊び」の項以外の項は、聞き取り対象者が子どものころの様子である。また、宝立町の学校教育については、第3節以降で詳しく述べる。

2.2.1 男の子の遊び

Aさん（上八幡、男性、60歳代）

寺の境内や広い家の庭で缶けりや鬼ごっこ、虫取りなどをして遊んでいた。

Bさん（上稲荷、男性、70歳代）

夏は海で遊んだ。ほかに、メンコをしたり、こまを作ってこまで遊んだりしていた。手の上でこまを回しながら鬼ごっこをするなど、オリジナルな遊びを作っていた。

2.2.2 女の子の遊び

Cさん（上八幡、女性、90歳代）

お手玉や縄跳び、カタコと呼ばれる竹の板4枚を使って表裏を合わせる遊びをした。

Dさん（宗玄、女性、70歳代）

お手玉、あやとり、なわとび、浜での砂遊び、お絵かきなどをして遊んだ。

2.2.3 現代（2010年代）の子どもの遊び

この項では、聞き取り対象者の目から見た、現代（2010年代）の子どもの遊びについて述べる。

Aさん（上八幡、男性、60歳代）

今の子どもたちはもっぱらゲームをして遊ぶことが多く、外に出て遊ぶことは少ない。しかし、昔ほどではないが、今の子どもも海で遊ぶ。

Eさん（鵜島、男性、30歳代）

今の子どもたちは、テレビゲームで遊ぶことが多い。男の子だと、海が近いので釣りをして遊ぶこともある。

2.2.4 その他

Bさん（上稲荷、男性、70歳代）

中学校に入ったら、田んぼや畑の手伝いをさせられた。田んぼをくわでおこしたり、草むしりをしたりした。

Fさん（宗玄、女性、60歳代）

30年ほど前は、宗玄地区で子ども会があったが、20年ほど前から、子どもの減少によってなくなった。また、宝立地区にも現在子ども会はない。子ども会があったころは、活動として、廃品回収、バーベキュー、七夕まつりなどが行われていた。

このように、聞き取り対象者が子どもの頃は、自分たちで遊びを考え、海や神社の境内といった、地域にもとからあるものを上手く使って遊んでいることが分かる。一方で、現代の子どもは家の中でテレビゲームをして遊ぶことが多いと聞いて、残念に感じた。この結果を受けて私は、子どもの数の減少により、近くに同年代の子どもが少ないため、家でテレビゲームをしているのではないかと考えた。

3. 宝立町の学校教育の変遷

ここからは、宝立町の学校教育について述べる。現在宝立町の学校は、宝立小中学校1校のみであるが、かつては小学校が最大5校、中学校が最大2校、高等学校最大2校（町外の高校の分校を含む）のほか、女学校もあった。

この節では、『宝立の今昔』（1981）の教育の箇所を参考に、宝立町の学校教育の変遷についてまとめるとめる。

3.1 宝立町の教育の歴史

ここでは、太平洋戦争までの宝立町の教育の歴史について述べる。

3.1.1 学制発布前

明治5(1872)年に学制が発布されるまでは、宝立町の教育は14の寺子屋で行われていた。鵜飼に3、春日野に4、鵜島2、大町泥木2、馬渡、善野、樫原各1であり、寺の住職や一般住民が塾主となっていた。

3.1.2 学制発布後

学制発布後、宝立町にはたくさんの学校ができた。ここでは、現在の宝立小中学校、特に宝立小学校の前身である、鵜飼小学校・鵜島小学校・柏原小学校の3校の設立の過程を見ていく。

3.1.2 (a) 鵜飼小学校

明治8(1875)年4月に鵜飼小学校が創立し、当初は金峰寺の堂宇を仮校舎に充てていた。8ヶ村から児童が通学していたが、校舎が狭くなったため、鵜島・樫原の2校を分離した。明治14(1881)年に正式な校舎ができ、3度の移転と6度の改名を経て、昭和22(1947)年4月に鵜飼小学校となった。

3.1.2 (b) 鵜島小学校

明治9(1876)年9月に覚性寺を校舎としたことから、鵜島尋常小学校が始まった。明治12(1879)年11月に校舎を建築して、公正小学校と名乗った。明治25(1892)年に鵜島尋常小学校と改名し、鵜島国民学校を経て、昭和22(1947)年4月、鵜島小学校となった。

3.1.2 (c) 柏原小学校

柏原小学校は、明治9(1876)年8月に鵜飼小学校から分離し、大町泥木・馬渡の2分校を置いて出発した。明治10(1877)年6月に馬渡分校が独立した。創立当初の柏原小学校は、住民の家屋を借り上げて校舎に充てて授業を行っていた。明治25(1892)年4月、柏原尋常小学校と名付け、大町泥木校を廃止して、小屋分教場を設置した。大正9(1920)年の校舎新築、昭和16(1941)年の柏原国民学校を経て、昭和22(1947)年4月、柏原小学校となった。

3.2 太平洋戦争後

太平洋戦争終了後の、昭和22(1947)年4月の時点で、宝立町には鵜飼小学校、鵜島小学校、柏原小学校、馬渡小学校、小屋小学校、宝立中学校、宝立中学校馬渡分校・小屋分校、宝立町立女子農学校の7校2分校、計9校あったが、現在では、宝立小中学校の1校のみである。そこで、戦後の昭和22(1947)年から現在までの、宝立町の学校の新設・統廃合の流れを以下の表にまとめた。なお、この表では、『宝立の今昔』(1981)のほか、現地調査で宝立小中学校を訪問した際にいただいた宝立小中学校のパンフレットも参照している。

表2 宝立町の学校の新設・統廃合の流れ

	出来事	学校数
昭23 (1948). 3	宝立町立女子農学校廃校	8
昭26 (1951). 6	石川県立飯田高校定時制課程宝立分校が宝立中学校に開設	9
昭35 (1960). 8	宝立中学校小屋分校廃止	8
昭36 (1961). 4	鶺鴒・鶺鴒島・柏原小学校が統合し宝立小学校創立	6
	宝立中学校馬渡分校が馬渡中学校として独立	6
昭38 (1963). 4	石川県立珠洲実業高等学校設立	7
	石川県立飯田高校定時制課程宝立分校が珠洲実業高校の所管に ¹⁾	6
昭57 (1982). 4	小屋小学校を宝立小学校に統合	5
平7 (1995). 4	馬渡小学校を宝立小学校に統合	4
	馬渡中学校を宝立中学校に統合	3
平21 (2009). 3	石川県立珠洲実業高校が閉校。飯田高校総合学科となる。	2
平24 (2012). 4	宝立小学校と宝立中学校が小中一貫校になる	1

(出所 『宝立の今昔』、宝立小中学校パンフレット)

最大9校あった宝立町の学校が1校になるということは、校区と通学範囲が広がることを表す。宝立小中学校の児童生徒はどのように通学しているのだろうか。宝立小中学校の教頭先生に電話でお話をお伺いした。小学生は徒歩かバスで通学している。宝立小中学校から本鶺鴒島地区までの小学生は徒歩で、宗玄地区より遠くの児童は北鉄バスで通学しており、北鉄バスのバス代は珠洲市から全額補助が出ている。柏原地区には北鉄バスが通っていないため、珠洲市がスクールバスを出している。中学生は全員自転車で通学している。しかし、柏原地区の生徒は小学生と同様、珠洲市のスクールバスで通学している。柏原地区には、小学生2人、中学生1人の計3人が宝立小中学校に通っている。現在、馬渡地区には子どもがいない。

4. 宝立小中学校

宝立小中学校は、石川県唯一の小中一貫校である。現地調査の際、宝立小中学校を訪問しお話を伺って、小中一貫校ならではのさまざまな仕組みや取り組みについてお話を聞くことができた。この節では、宝立小中学校と小中一貫校の概要を取り上げたあと、宝立小中学校の児童生徒の学校生活について、授業と課外活動の両面から紹介する。また、この節で記述していく内容は、主に、宝立小中学校の校長先生であるAさん（上八幡、男性、60歳代）への聞き取りにもとづく。

4.1 宝立小中学校の概要と小中一貫校について

この項では、宝立小学校と宝立中学校が小中一貫校になるまでの過程を述べた後、宝立小中学

校のさまざまな仕組みや、小中一貫校ではない学校との違いを述べる。

4.1.1 小中一貫校になるまでの過程

旧宝立小学校の校舎は鉄筋コンクリート造りであったが、昭和 56（1981）年に定められた耐震基準を満たさない造りであった。そのため、耐震工事をしなければならず、耐震工事を行う際に、少子化が進んでいることも考慮して、小中学校併設ではなく、小中一貫校にしようという話になった。宝立中学校のテニスコートがあったところに小学校の校舎を新築し、平成 23（2011）年 9 月から、小学生と中学生が同一校舎で授業を行うようになり、平成 24（2012）年 4 月から小中一貫校となった。

4.1.2 小中一貫校とは

小中一貫校については、学校教育法に記載がないため、文部科学省の特例で認められており、宝立小中学校でも学校教育法に基づいた教育がなされている。小中学校は全国で 100 校ほどである。宝立小中学校では、中学 1～3 年生を、7～9 年生と呼んでおり、従来のように 6 年間で 3 年間で区切るのではなく、1～4 年生を前期、5～7 年生を中期、8・9 年生を後期という 3 期に分けて教育を行っている。また、珠洲市内や宝立小中学校校区宛の文書には、「7 年生・8 年生・9 年生」という表記を使っている。職員室の先生方の机の配置も前期学年担当の先生方・中期学年担当・後期学年担当と固まっている。全校生徒は 100 人で、どの学年も 10 人前後であるが、複式学級は組んでいない。以下、特に断りがなければ、中学 1～3 年生を「7 年生・8 年生・9 年生」と表記する。

4.1.3 小中一貫校のメリット・デメリット

小中一貫校としてのメリットは、中学生の生活が分かるため、小学生の子どもが安心して学習できること、中 1 ギャップが少ないことが挙げられた。中 1 ギャップとは、小学校から中学校に上がって、新しい環境にうまくなじめなかったり、中学校の授業のスピードについていけなくなったりすることである。また、宝立小中学校では、これに加えて、授業や課外活動の中で、地域の人と交流する機会が多いため、地域の人が学校をよく理解しているというメリットもある。地区の方々にとっては、県内初の小中一貫校が自分の地区にあるという、感慨深さや誇りがあるようだ。なお、宝立小中学校と宝立地区の住民との交流の取り組みは、次の節で述べる。また、小中一貫校の視察のために多くの教育関係者が宝立地区にやってきて、珠洲市や宝立地区でお金を使ってくれるため、地域経済にも恩恵をもたらしている。

小中一貫校としてのデメリットは、小学生から中学生に上がっても、学校・校舎・友達・先生といった周りの環境が変わらないため、6 年生から 7 年生の切り替えがうまくできないということが挙げられる。これは、メリットで挙げた、中 1 ギャップが少ないという点の裏返しともいえる。7 年生で気持ちを切り替え、気持ちを引き締めるために、制服・体操服を変える、教科担任制の導

入、開放的だった教室と廊下の間に仕切りを設けるなど、さまざまな工夫を行っている。

4.1.4 宝立小中学校の先生方

宝立小中学校の先生方は、従来の小学校・中学校の分け方をすると、小学校に6人・中学校に6人となっている。石川県では小学校の先生と中学校の先生は、教員免許上は別であるため、免許に応じて小学校か中学校のどちらかの授業しか担当することできないことになるが、この12人の先生は、県から兼務辞令が下りているため、小学校と中学校の両方の授業を担当することができる。校長先生は小中学校で1人、教頭先生は小学校で1人、中学校で1人の計2人いる。先生方に関しては、まだまだ小学校と中学校での区分もなされており、他の小学校・中学校との兼ね合いや教員の制度としての面からか、小中一貫にできない側面もうかがえる。

4.1.5 その他

現在、小中学校で1つの校歌が定められているが、宝立小学校・宝立中学校の校歌も残っており、体育館の前方には3つの校歌が掲げられている。7年生から部活動が始まるが、その大会の激励会では、宝立中学校の校歌が歌われており、校歌が使い分けられている。

卒業後は、たいていの生徒が珠洲市内の石川県立飯田高校に行き、まれに部活動で金沢市内の高校に行くこともある。校長先生は児童生徒に、高校までは地元に残るように話しているそうだ。

4.2 児童生徒の学校生活（授業面）

ここからは、宝立小中学校の児童生徒の学校生活について、授業と課外活動の双方から述べる。宝立小中学校では、中学生を中心に指導している先生が、小学生の授業を持つ「乗り入れ授業」を積極的に行っている。また、先生の数が少ないため、主要5科目以外の各教科に1人以上先生を配置することができないので、2つの教科を教える先生もいる。さらに、習熟度別に1学年を2つに分けて、きめ細かい指導を行っている。

授業内容としては英語と総合的な学習の時間が特徴的であった。以下に述べる。

4.2.1 英語

平成23（2011）年4月に、学習指導要領が改正され、小学校での英語教育が必修となった。この改正では、小学校5・6年生に英語教育が必修化されたが、宝立小中学校では、1年生から英語に触れることができるようになっている。1・2年生は英語に触れることが目的で、珠洲市が定めた国際交流員が担当している。3年生からは、「英語活動」として、ALTの先生が週に1回教えに来ている。宝立小中学校は、文部科学省が定める英語科特例校に指定されているため、5年生からは、「きりり英語科」として、中学校1年生の教科書を使って週に1時間の英語の授業を行っている。英語が学べる、英語ルームも設けられている。9年生では、英語でスピーチも行っている。英語の授業に関しては、まだまだ課題もあり、英語教育の開始が前倒しされたことにより、早期段

階から英語嫌いの子どもが出てくるのではないかとの懸念もある。

4.2.2 総合的な学習の時間

宝立小中学校では、総合的な学習の時間の全部または一部を使って、「ふるさと珠洲科」の授業を行っている。自分の将来やキャリア形成・仕事について学ぶ時間とは別に、ふるさと学習に限定した内容での授業を行っている。「ふるさと珠洲科」の時間を使って、地域の方たちと、そば作りやもち米作りも行っている。実際に「ふるさと珠洲科」の授業を見せていただいたので、詳しくは次の節で述べる。

4.3 児童生徒の学校生活（課外活動面）

ここからは、授業以外の時間における児童生徒の学校生活の様子を、学校行事、部活動、委員会活動の3つの点から述べる。

4.3.1 学校行事²⁾

宝立小中学校の入学式は1年生で、卒業式は9年生でそれぞれ行われる。一貫校でない場合の小学校卒業と中学校入学の時期にあたる、6年生の終わりと7年生の始めには、それぞれ簡単なセレモニーを行っており、6年生の終わりのセレモニーの際に、学校教育法に基づき、6年間の過程を修了したことを示す証書を渡している。そのほかにも、9月の運動会や、11月のマラソン大会、5月の避難訓練は9学年一斉に行っている。避難訓練では、1.3kmはなれた高台まで避難する練習をしている。また、1～4年生は、6月に相撲大会も行われる。

4.3.2 部活動

宝立小中学校の7～9年生は全員何らかの部活動に入る。文化部はなく、野球部（男）、ソフトテニス部（男女）、女子バスケットボール部（休部中）の3つの部活動がある。子どものうちに体をしっかり動かしておこうという考え方のもとで、部活動が行われている。野球部はほかの中学校と合同チームを作りながらではあるが、野球部、テニス部ともに珠洲市内でいい成績を収めている。

4.3.3 委員会活動

3年生～9年生までの全員が何らかの委員会に所属する。上級生にとっては下級生を思いやるいい機会であり、下級生にとっては、上級生の姿を見て、目標を見つけるチャンスでもある。

以上のように、授業面では、9年間という長期的展望で英語や総合的な学習の時間の授業が行われている。課外活動の面では、1年生～9年生まで幅広い年代の子どもたちが協力し、相互により作用を及ぼすような工夫がたくさんされていることが分かる。

5. 「ふるさと珠洲科」

前述のように、「ふるさと珠洲科」は、総合的な学習の時間と、1・2年生の生活科の授業の時間の一部または全部を使って行われる、ふるさと学習に限定した授業のことである。この節では、「ふるさと珠洲科」の概要を述べたあと、2014年10月2日に見せていただいた、実際の「ふるさと珠洲科」の授業の様子を述べる。なお、この節で述べる内容は、主に、宝立小中学校の校長先生であるAさんと、「ふるさと珠洲科」を中心となって担当していらっしゃる、宝立小中学校の先生のGさんからお伺いしたことである。本調査の際にお伺いしたことと、補充調査の際にお伺いした内容が混在していることをここで断っておく。

5.1 「ふるさと珠洲科」のねらい

「ふるさと珠洲科」では、「豊かに生きる力」を育むために、ふるさと宝立・珠洲の「自然・文化・産業・人」に学び、そのよさを知り、ふるさとへの愛情と誇りを育むことを目指している³⁾。珠洲市には大学がないため、高校を卒業して進学しようと思うと、どうしても市外に出ることになってしまう。また、珠洲市や宝立町に住んでいる大人たちは地元の魅力を感じる人が少なく、子どもたちが地元でネガティブなイメージを持つような言葉をかけたり態度を取ったりしてしまうことがあるそうだ。そこで、宝立小中学校の先生たちは、子どもたちが将来珠洲市外に出てしまっても、珠洲市や宝立町にマイナスイメージを持たずに、いつまでも地元で愛着と誇りを持ってほしいとの思いを持って「ふるさと珠洲科」の授業を行っている。

また、「ふるさと珠洲科」には、「地域とのかかわり」というねらいもある。宝立小中学校の児童生徒たちは、小中一貫校でなおかつ各学年の人数も少ないため、どうしても限られた人間関係の中で過ごすことになってしまう。そのため、さまざまな人と関わる機会を設けたいとの思いもある。そのため、地元のNPO法人の方々とのもち米作りや、青年団の方々とそば作りを行っている。そば作りやもち米作りは、休耕地や耕地整理の際にできた土地を使って行われており、地域にとっても役立っている。また、1・2年生は、地域の高齢者とともに、大豆や小豆を作っている。これは、1人暮らしの高齢者が持つ維持管理が難しくなった畑を使っている。「ふるさと珠洲科」の授業の一環である農業体験については次の項で詳しく述べる。

5.2 農業体験学習

もち米作りは8年生、そば作りは9年生が行っている。もち米は主に手作業で行われている。田植えや稲刈りはNPOの方と生徒が行い、刈り取った稲を天日干しにする、はざぼしは生徒が行うが、草刈りや脱穀は地域の方やNPOの方が中心となって行っている。そば作りでは、青年団の

方々と、種からそば粉を作り、そば打ちまで行っている。今年（2014年）で5年目にあたるようだ。また、1・2年生が地域のお年寄りと一緒に育てた大豆や小豆と8年生が育てたもち米を使って11月上旬に餅つき大会が行われている。

5.3 各学年の学習内容

前項で述べた農業体験学習は「ふるさと珠洲科」の学習の一部であるが、各学年はどのようなことを中心にふるさと宝立町や珠洲市について学んでいるのだろうか。

前期（3・4年生）は、宝立町の自然や人々など、宝立町について学習している。具体的に、3年生は生き物について、4年生は宝立町の祭り・文化・産業など、町の人々の生活について、調べ学習を中心に学習している。中期（5～7年生）は珠洲市の伝統について学習している。5年生は塩づくり、6年生は珠洲焼、7年生はふるさと珠洲の里山について、調べ学習やフィールドワーク、体験活動を通して学習している。後期（8・9年生）では、珠洲市を包括的に捉える学習を行っている。8年生では、農業体験や職場体験の傍ら、珠洲市のいいところ探しをして、珠洲市を全体的に理解し、9年生で行う「珠洲の未来への提言」の準備を始める。9年生では、個人またはペアでテーマを決めて、聞き取り調査やアンケート調査など各自で調査を行い、最終的には、「珠洲の未来への提言」として、年度末の学習発表会で発表する。この発表会で使われたスライドと提言内容は、珠洲市役所のロビーに掲示され、一般市民の方々も見るできるようになっている。昨年のテーマでは、Iターンや珠洲野菜のブランド化、スポーツを通じた珠洲市の活性化などがあった。年度末の学習発表会は、3～9年生まですべての学年が1年間学んできたことを発表する場であり、地域住民の方や市議会議員の議員さんまで、さまざまな方がいらっしゃる。

5.4 「ふるさと珠洲科」視察報告

2014年10月2日に、再び宝立小中学校を訪問し、「ふるさと珠洲科」の実際の授業を見せていただいた。この日は、3年生・6年生・8年生の授業を見ることができた。

5.4.1 3年生

3年生は、前述のように「宝立町の自然」という観点からふるさとについて学んでおり、この日は、「昔と今のうかみ川について調べよう（黒板表記のまま）」というテーマで、鶴飼川の生き物や歴史など各自が家族や祖父母から聞き取り調査をしたり、自分で調べたりしたことを3つのグループに分かれて発表していた。写真1、写真2が3年生の授業の様子である。この日は、里山里海に詳しい外部の方と、宝立小中学校の先生の2人で授業を行っていた。

5.4.2 6年生

6年生は、「宝立地区窯跡見学のとめをしよう」ということで、9月に行った窯跡見学の様子

を模造紙にまとめていた。写真3、写真4が6年生の授業の様子である。図書館の本やパソコンを使って調べ学習をしている児童もいた。

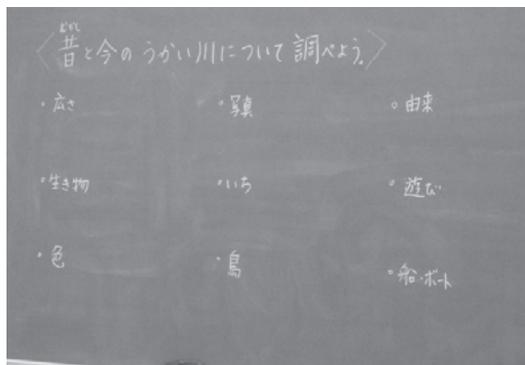


写真1 3年生の授業内容
(2014年10月2日筆者撮影)



写真2 3年生児童の話し合いの様子 (2014年10月2日筆者撮影)

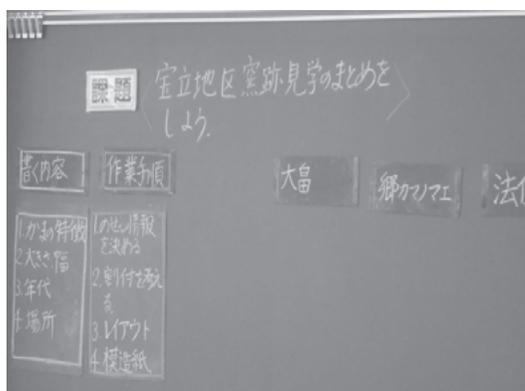


写真3 6年生の授業内容
(2014年10月2日筆者撮影)



写真4 まとめ作業を行う6年生児童
(2014年10月2日筆者撮影)

5.4.3 8年生

8年生は、9年生で行う「珠洲の未来への提言」に向けて題材探しを行っていた。この日は、「珠洲のよいところを見つけよう」というテーマで、3つの班に分かれて、ブレインストーミング⁴⁾をした後、KJ法⁵⁾でまとめていた。写真5～8が8年生の授業の様子である。生徒が挙げた珠洲市のよいところとして、見附島やお酒、お祭りなどがあつた。この「珠洲のよいところ探し」を通じて、9年生に向けての準備だけでなく、珠洲市の資源の発掘を行い、修学旅行で東京都を訪れた際に、石川県のアンテナショップで、珠洲市や宝立町のPRを行うねらいもある。

ブレインストーミングやKJ法は私たちが大学の授業で行うことがあるため、それを8年生が行い、しっかりとしたまとめを行っていることに大変衝撃を受けた。



写真5 珠洲のよいところについてまとめる8年生 (2014年10月2日筆者撮影)

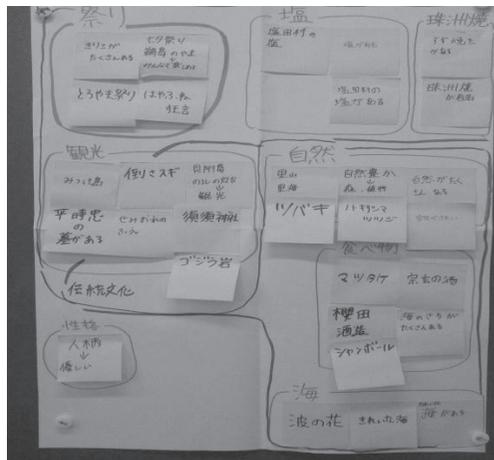


写真6 1班のまとめ (2014年10月2日筆者撮影)

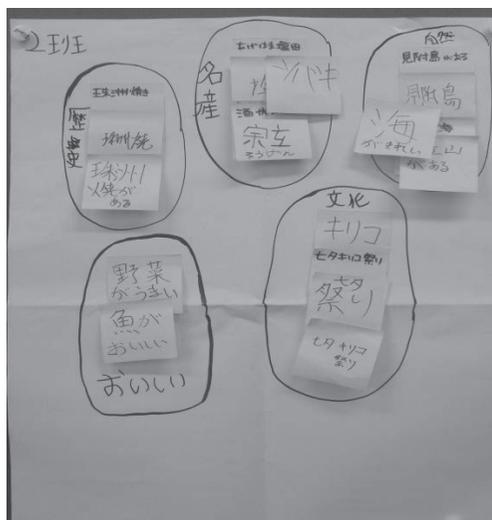


写真7 2班のまとめ (2014年10月2日筆者撮影)

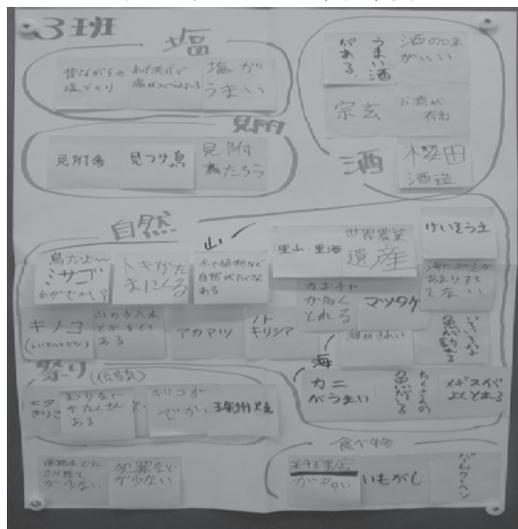


写真8 3班のまとめ (2014年10月2日筆者撮影)

以上のように、「ふるさと珠洲科」は、先生方や地域の方のさまざまな思いや願いのもとに行われている。「ふるさと珠洲科」の授業を取り入れて、児童生徒が、珠洲市や宝立町に愛着を持って卒業するようになったとGさんはおっしゃっていた。また、先生方も試行錯誤しながらも、楽しみながらやっているそう。例えば、9年生の個人またはペアによる調査では、珠洲市全域を範囲

とし、聞き取り調査やアンケート調査を行っている。その際は、聞き取りをする場所まで、先生方が、授業のない時間を使ってかわるがわる生徒を送迎している。この点は、宝立小中学校の規模でないとできないことであるとともに、宝立小中学校の教職員や宝立地区の方々、珠洲市の方々が一丸となっているのを感じる。さらに、昨年の学習発表会で9年生が珠洲市の未来のために提言した「Iターン」や「(地元食材の)ブランド化」といった言葉は、私は大学に入ってから初めて耳にした言葉であったため、そのことについて中学生が調査を行っていると思うと、感動を覚えた。もちろん、生徒たちが当初から「Iターン」や「ブランド化」といった言葉を知っていたわけではなく、先生方がヒントを与えたようだ。

「ふるさと珠洲科」の授業が、想像以上にハイレベルなものであり、この授業を受けた宝立小中学校の卒業生たちが金沢大学に入ってくるのが大変楽しみだと感じた。

6. 考察

第2節では、宝立町の子ども数の変遷と子どもの遊びについて、第3節では宝立町の学校教育の変遷について、第4節では石川県唯一の小中一貫校である宝立小中学校について、第5節では、宝立小中学校の特徴的なカリキュラムの1つである「ふるさと珠洲科」について述べた。宝立小中学校の卒業生は年々減少しており、現在の卒業生の数は、宝立小中学校創設時であり子どもの数が一番多かったころの15分の1ほどになってしまっている。そんな中でも、宝立小中学校は、小学校と中学校を一貫校にし、9学年一斉に行事を行ったり、独自のカリキュラムを作ったりと、児童生徒がこの地区で最大限学び、この地区に誇りと愛着を持って卒業していけるような工夫を行っている。また、前項でも述べたが、「ふるさと珠洲科」の授業で、先生方がかわるがわる9年生を送迎し、珠洲市内全域での調査に協力できるのも、1学年が少人数だからだとGさんはおっしゃっていた。このように、児童生徒数が少ないからこそできることもあり、宝立小中学校では、地域の資源や人々、学校の規模などありとあらゆる現状を最大限にプラスに活用し、子どもたちの教育を全力で行っていることが分かる。

実際に、聞き取り調査をした、宝立町鶴島地区の方々も、子どもが少ないことを残念に思っていることが言葉の端々から感じられた。しかし、素晴らしいカリキュラムと豊かな自然の中で育った優秀な子どもたちは、必ず珠洲市に戻ってきて珠洲市や宝立町のために働いてくれると信じている。

7. おわりに

本調査を終えて金沢市に戻って私が最初に感じたことは、「また宝立町に行きたい」であった。海が近く、見附島は雄々しく、夜は静かでとても星がきれいで、海が好きな私にとって、宝立町は本当にいいところであった。3日目にみんなで見附島まで夜の散歩に行ったときに、浜辺から見る星空の美しさに心を奪われ、そこから星も好きになった。本調査に行く際は、毎日聞き取りができるほどのコミュニケーション力と聞くことがあるのか、お話を聞かせてくださる方がいるのか不安であったが、教育だけでなく、曳山や出稼ぎのこと、農業のことなど、大学生で宝立町の住民でもない私に大変わかりやすく丁寧に説明していただいて、もっともっとお話を聞きたいと思うようになっていた。それとともに、宝立町の人々のことも好きになっていた。そして、補充調査に行くことになり、「また宝立町に行きたい」という願いが叶った。その際には、貴重な時間を割いて「ふるさと珠洲科」のお話を聞かせてくださり、また、電車を乗り継いで4時間かけて帰ろうとしていた私を、穴水町まで車で送ってくださり、本当に感謝してもきれない思いであった。もちろん、また機会があれば宝立町に行きたいと思っている。

最後に、本調査や補充調査の際にお世話になった方々への感謝の気持ちを述べて、この報告書を締めくくる。本当にありがとうございました。

注

- 1) 石川県立飯田高等学校 HP「飯田高校の概要」内の『飯田高校の沿革』より
- 2) 行事が行われる時期はすべて、珠洲市立宝立小中学校 HPの「行事予定」参照
- 3) 2014年10月2日に宝立小中学校を訪問した際にGさんからいただいた資料参照
- 4) ブレーンストーミング：創造性を開発するための集団的思考の技法。会議のメンバーが、自由に意見や考えを出し合って、すぐれた発想を引き出す方法（『広辞苑 第5版』）
- 5) KJ法：KJは考案者川喜多二郎氏の頭文字から。カードによる情報整理・アイデア発想法の一つ（『大辞林 第三版』）

